

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第10回/アール・デコ博覧会(その1)

Residence of Prince Asaka 1933—

「アール・デコ」の語源となった、1925年にパリで開催された現代装飾美術・産業美術国際博覧会は、フランスの工芸界の危機意識から計画されたものでした。当時のフランス、特にパリの洗練された趣味と工芸の伝統は他を寄せ付けないのであり、1900年のパリ万博におけるアール・ヌーヴ^{テイスト}の勝利によって、20世紀もフランスが世界の工芸界の頂点に君臨すると誰もが思っていました。

しかし、新世紀の幕開けは新しい消費者と嗜好を誕生させることになったのです。オーストリアのウィーン工房(1903年)、ドイツ工作連盟(1907年)とバウハウス(1919年)、そしてオランダのデ・ステイル(1917年)など、各国で開花したモダニズム運動の衝撃によって、人々の目には旧来の装飾美術がいかにも古色蒼然と映り、手業に頼るパリの工芸品は次第に割高だと考えられるようになったのです。1913年には対米輸出額でフランスはドイツに抜かれ、その地位後退は明らかでした。

フランスの工芸界も1882年に装飾美術中央連盟を結成し、その後、芸術・工業奨励協会(1889年)、美術家・装飾家協会(1901年)など各種団体を設立し、多方面からの近代化を目指していました。しかし事態の緊急性はより大きなインパクトを必要としていたのです。1909年には、美術批評家ロジェ・マルクスが、現代の社会に適応した装

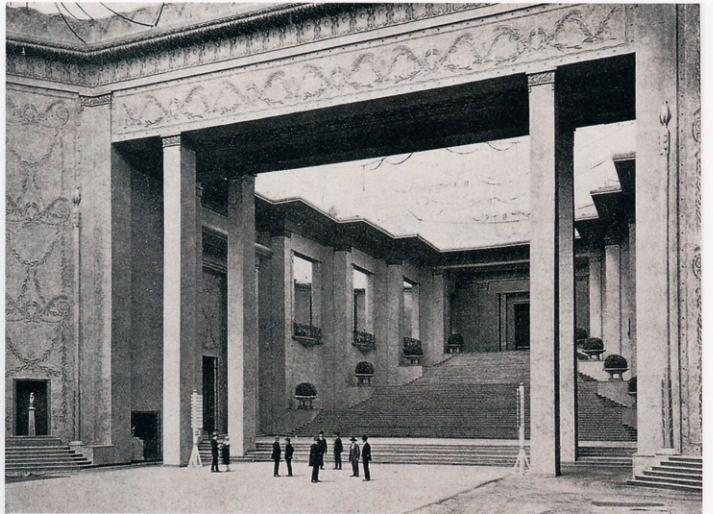


図1

飾美術改革の必要性と博覧会開催の有効性を訴えます。

そしてついに1911年、上記の三団体は美術家・装飾家協会会長ルネ・ギユレらが提案した、パリで装飾美術の国際博覧会を開催する草案に同意し、これを請願としてフランス議会下院、パリ市議会に提出。フランス政府は同博覧会の1915年開催を決定したのです。

しかし準備不足との判断から、前年に会期延期が決定。第一次世界大戦を経て、1923年の開催が決まりますが、不安定な経済状況を理由に再び1925年に延期と相次ぐ変更を余儀なくされました¹。「沈滞セル仏国工藝界ヲ振興シ、革新的生氣ヲ注入スル²」という切実な危機意識を背景に、フランスの威信をかけた博覧会がようやく幕を開けたのは、計画から実に14年後のことだったのです。

(次号に続く/関)◆

図1. ルトロヌによって改装されたメイン会場のグラン・パレ内部

図2. 博覧会のメイン・ゲート「名譽の門」(設計:ファウヴェ、ヴァートル金工:プラント)

主要参考文献:

Charlotte Benton, "The International Exhibition", *ART DECO 1910-1939*, V&A Publications, 2003, London, pp.141-155.

利光功「EXPO 1925—モダニズムの空中楼閣」、『ユイカ』1984年12月号、青土社、pp.166-174。

商工省商務局「巴里万国装飾美術工芸博覧会政府参同事務報告」、1927年

*1. 延期を繰り返した開催予定年は資料によって記述の相違が見られる。本稿はBenton 2003に従った。

*2. 日本産業協会編「巴里万国装飾美術工芸博覧会日本産業協会事務報告」1926年、p.4。

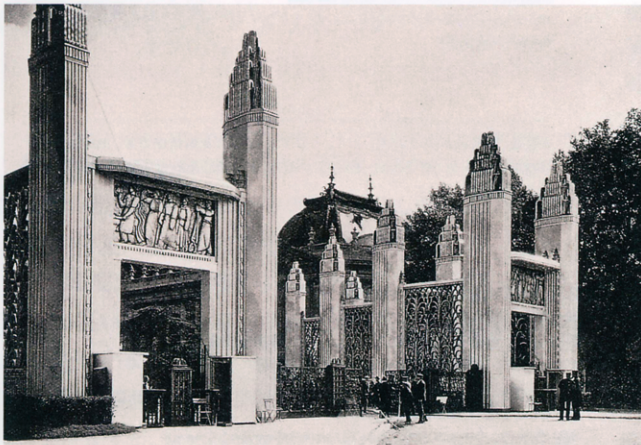


図2